随筆・提言

# 沖縄　車社会の不思議

日本経済新聞那覇支局長
本田寛成

青は進め。黄色は注意して進め。赤は急いで進め――。沖縄での信号の進み方をタクシーの運転手さんはそんな風に説明してくれた。「急いで」の部分は早口にして冗談めかした口調だったが、不思議な説得力をもって耳に響いた。この　標語　に一定のリアリティーがあることを否定するのは難しいのではないか。少なくとも本土から遊びに来た私の知人には、交通上の注意として同じように話している。もちろん、冗談めかしてだが。

こんなことがあった。昨年春、私が着任して間もなくのことである。那覇市役所に用事があり、琉球新報本社前で私は信号を待っていた。赤から青になり、横断歩道を渡り始めたその時、猛スピードで車が突っ込んできた。車と私の双方がすれすれのところで反応し、危うく難を逃れたが、正真正銘、間一髪。肝を冷やしたどころではなかった。

それ以来、三差路や交差点で注意を払うようになった。観察の結果、直進右左折を問わず、赤信号で進む車は珍しくない。車の流れに沿ってカエルの卵よろしく数珠つなぎに進むというケースばかりではなく、まったく孤立した一台の車が白昼堂々、赤信号を低速で悠然と駆け抜ける場合も少なくない（多くは女性ドライバーだ）ことが判明した。

もう一つ気付いたことがある。これも大きな特徴だと思うのだが、路地など狭い道から大きな通りに出ようとする車に対し、優先車線の車が平気で道を譲る（入れてやる）ということである。道路がすいているならともかく、渋滞であろうとも気にしない。雨が降る夕方のラッシュ時で、信号が赤から青になっても全然前に進まず、普通ならそうでなくともイライラしそうな時でさえ、脇からの車を入れる。すでに二回信号が変わっても前に進んでいない……。

至るところで頻繁に繰り返されるこの　蛮行　。渋滞が大変と嘆くなら、こんなことをやめればいいではないか。渋滞がなかなか解消しない大きな要因となっていることは絶対間違いない。イライラに馴らされてきたがゆえに、沸点が低くなりがちなナイチャーの怒りは容易に頂点に達し、思わず金切り声を挙げてしまう。「なぜだ」。

ある社会で自然発生的に形成されたルールには、その土地に住む人々の共通した考え方や感じ方、様々な了解事項が背景にある。二十六年間パリに滞在し、独特の思想を築いた森有正という哲学者がいた。彼は、日本との比較でフランスの歩行者とドライバーの関係について、信号に頼らず、お互いが目を見て合図を交わすことを指摘、人間を基礎とし、個が確立した文明における自立した個人間の契約について言及したことがあったように記憶している。その当否はおくとして、面白い解釈だと思った。

さて、なぜ脇道からの車を幹線道路側の車が進んで入れてやるのか。道路の未整備とともに、土地の区画整理が進んでいないという基本的な事情がある。島嶼県ゆえ厳格に分刻みのスケジュールを組むことができず、組む必要もない社会ということもある。そもそも多少の時間の遅れなど気にしないということがあげられるだろう。何よりも、入れてあげなければかわいそうだ、という気分がある。入れてやればいいさあ。明日は我が身、いつも入れ替え可能な立場であるのだから、情けは人のためならず、の精神が浸透しているともいえる。相互依存・扶助の一般化の典型だ。

以上をまとめると、ウチナータイム、テーゲー主義、ユイマールという沖縄の伝統的な精神・行動様式が混交し、発露した一結果と解し得るのではないだろうか。ストレスの低い社会内で形式的な合理性より習慣から来る実体的な満足度をより優先している、と。

困ったことが一つある。この結論を妥当とするならば、なぜ赤信号で突っ込むのか、についてはやや言葉足らずになる。それについては次回のお楽しみ。